

2022 年度報告書の刊行に寄せて

法政大学学生センター長 齋藤 勝

2022 年度も引き続き新型コロナウイルス感染症への対応が求められましたが、以前のような緊迫感はなくなり、大学全体が活況を取り戻してきました。

課外教養プログラムについても、プログラム数は 25 から 29 への増加にとどまりましたが、参加人数は 3 割ほど増しました。

実施形態については、対面によるプログラムが増えるとともに、「東京ジャーミイに行く！～食事・宗教・歴史などのイスラム世界を体験しよう～」という学外施設で実施するプログラムが復活しました。一方、この二年間で定着したオンラインによるプログラムも引き続き実施され、「過去の富士山噴火から見る 私達の防災」のように遠隔地にいる講師の方に講義していただくプログラムもありました。このようにさまざまな実施形態が組み合わせられることで、プログラムの可能性はより広がっていくのではないかと思います。

内容面に注目してみると、2019 年度以前の学生発案のプログラムには実際の生活に役立つ「How to」に関する内容のものが目立ちましたが、2022 年度は「生態系を脅かすインフラ開発！？～私たちの暮らしの裏で何が起きているのか～」、「ゼロから学ぶ LGBTQ～より良い社会を私たちがつくるために」、「はじめての点字 ～知ってつながる社会の輪～」といった社会的関心によって企画されたプログラムや、「世界遺産の価値を未来へ！ ～知られざる世界遺産のお話～」のように知的好奇心によって企画されたプログラムなど、より「教養」プログラムとしての色合いの濃いものが目立ちました。これは、この間の閉塞的な生活を受けて、学生の関心の置き所が変化してきたことを表しているのかもしれませんが。

「書道入門教室～明日から字を書くのがちょっとだけ楽しくなる～」も特筆すべきものでした。書道を趣味とし、書に巧みな日本人学生から、初めて書道に取り組む外国人留学生まで、参加者は多岐にわたっており、皆、心から楽しめる内容となっておりました。普段から書道にいそしんでいる学生からは、「いつも一人でやっているの、大学で多くの人と一緒に書道に取り組むだけで楽しい。また開催してもらいたい。」との声があり、実に印象的でした。またこの企画は、学生生活課職員が自ら企画し、自らの技能を生かし、自らが講師となって実施されたものでした。このような企画・実施は、課外教養プログラムが始まった当初においては見受けられましたが、近年は見られなくなっていました。教職員が課外において学生とさまざまな経験をし、自らの成長につなげていくことも、ずっと大切にされていたことですので、その復活はたいへん意義の大きいことだと思います。

新型コロナウイルスに振り回された日常もようやく去り、2023 年度からは新しい日常が始まっていきます。それは 2019 年度以前とも異なるものになっていくことでしょう。そして、また新たな形の「課外教養プログラム」がきっと生まれてくるに違いありません。

2022 年度は、その萌芽が見えた年であったのではないかと思います。

2022 年度がそのような実りある一年になったのは、担当の職員や学生スタッフの頑張りとともに、多くの方々のお力添えがあったからにはほかなりません。あらためて、皆さまに、心より御礼申し上げます。

そして 2023 年度がさらに活発で新鮮な一年になることを願っております。